

雪三態 (1980年作曲 沢井忠夫合奏团委嘱)

庶民の心を歌いつづけた長澤さん



小島美子 (国立歴史民俗博物館名誉教授)

いま沢井忠夫さんと一恵さんが独奏箏と独奏十七絃をつとめ、沢井忠夫合奏団が箏3パートと十七絃を弾く長澤勝俊さん作曲の「雪三態」の録音を聞きながら、胸が熱くなった。長澤さんと沢井忠夫さんのお二人の思いや音楽がダブって訴えてきたからだ。お二人とも本当に心優しい方々だった。

長澤さんを知ったのは、私がまだ学生の頃で、長澤さんは人形劇団ブークで音楽を担当し、アコーディオンを弾いていたので、みんなから‘アコちゃん’と呼ばれていた。だから私にとっては長澤さんは晩年まで‘長澤先生’でも‘長澤さん’でもなく、本当は‘アコちゃん’だった。

人形劇団ブークは、庶民の立場で訴えかけるユニークな人形劇団で、アコちゃんもその心を自分の心として演奏したり作曲したりしていたのである。私はたまたま簡単なピアノを弾いたりバックコーラスに参加したりして手伝ったことがあって知り合いになった。そしてしばらくの空白の後、日本音楽集団で活躍するアコちゃんに会った。しかしアコちゃんはそういう立場になっても、人間性も、自分の心と作品の心の置き所も変わっていなかった。何時の間に邦楽器について、こんなに勉強したのかな?とは思ったが、彼は、やっぱり庶民の心の歌を歌っていた。初期の「人形風土記」を聞いたとき、これはやっぱりアコちゃん、長澤さんならではの作品だと思った。

そしていまこの「雪三態」を改めて聞いて、「人形風土記」にまっすぐ連なる作品と気が付いた。長澤さんは、この作品について、東北の有名なわらべ歌‘上見れば虫コ、中見れば綿コ、下見れば雪コ’を引用して、「そこには子どもたちの新鮮でリアルな観察眼と、

雪に対するあこがれとロマンがあります。この曲はこれらを基調として雪の世界を画いたものです。」と述べている。長澤さんはこういう子どもの心や感覚に素直に共感できる人だった。そしてそれをいつも庶民の感覚で作品にした。一部の洋楽系の作曲家のように、欧米の音楽界に目を向けて個性を出そうなどとは露ほども思わず、彼は素直に庶民の歌を歌いつづけたのである。日本音楽集団の方々もまた、それを自然に受け容れて、仲間として演奏しつづけてきたのは、アコちゃんにとっては本当に幸せだったのではないだろうか。

そしてこの「雪三態」の録音を聞くと、沢井さんご夫妻と沢井忠夫合奏団の皆さんが、この子どもたちの心を歌う長澤さんの気持ちに自然に共感して演奏しておられるのを感じる。沢井忠夫合奏団は、箏の合奏団としてひじょうに現代的に洗練された最高の合奏団だと私は思っているのだが、この曲では沢井忠夫さんは最初から無邪気でさえある。一恵さんのお話では、忠夫さんは独奏箏を演奏しながら、背中で指揮をしていたという。忠夫さんを心から敬愛していた合奏団の皆さんは、忠夫さんの背中から彼の意図するものや指示を十分に汲みとることができたのだろう。そして「雪三態」らしい演奏になり、委嘱を受けて作曲された長澤さんもさぞ満足なさっただろうと思う。その初演は1980年6月27日。芝公演のABCホールでの沢井忠夫合奏団の第2回演奏会。長澤さんも沢井忠夫さんもとともお元気に活躍されていた頃だった。



「アコちゃん」



沢井忠夫合奏団



故 沢井忠夫氏